

二〇二二年七月一六日

露涼し外湯へ続く石畳
雨晴れて雫煌めく蜘蛛の網
目を剥ける達磨大師にさくらんぼ
門柱に祈るがごとく蟬の殻
風鈴の響きわたりし蔵の街
風掴み風鈴の舌上機嫌

二〇二二年七月一五日

ミニ句会茶房の氷菓溶けぬ間に
烏賊釣の灯の散らばりし星の沖
木道のつづく限りに夏の草
病む父の薄き身体や籐寝椅子
せせらぎの樂足下とす橋涼し
大玉のスイカ砕けり河馬の口
涼風へ開けて古刹の花頭窓

二〇二二年七月一四日

銚町の屏風祭や京の宵
夕立去る土に匂ひを残しけり
片陰に内緒話の女の子
島の夏青海原へドローン飛び
なす胡瓜不揃ひなれど庭の幸
湯上りの子ら逃げ回る天花粉
通天橋視界を埋む青楓
看取る夜の雷鳴じつと聞いてをり

素 秀
かえる
ぼんこ
やよい
更 紗
たか子
たか子
たか子
花茗荷
明日香
なつき
宏 虎
あひる
菜 々
凡 士
たか子
素 秀
もとこ
智恵子
智恵子
はく子
なつき

二〇二二年七月一三日

夏雲へ紙ヒコーキの尾翼立つ
湧き水にをどけゆらげる冷し瓜
トロ箱に大西瓜売る朝市女
二〇二二年七月一二日
溪流に任せて揺らす素足かな
保育士の声かき消されプールの子
骨切りの音も肴や祭鱧

二〇二二年七月二一日

庭に咲くカサブランカの王者振り
梅花藻を揺らして豊かなる流れ
泥まみれ地下足袋覗く三尺寝
梅雨の傘手紙を胸にポストまで
語り部の目に赤く映ゆ夾竹桃

二〇二二年七月一〇日

梅雨出水日本列島総なめに
窓の風涼し一雨過ぎてより
広々とホルスタインの夏野かな
まだ声を聞かねど庭に蟬の穴
生温き風さきだててはたた神

素 秀
あひる
なつき
豊 実
たか子
凡 士
うつき
みづき
凡 士
豊 実
智恵子
満 天
こすもす
あひる
せいじ
む べ

毎日句会みのる選・二〇二二年七月一八日